

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 156号

平成27年4月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

「小西芳之助金曜会・同志会日誌語録」より (5)

愛とは自分の手に落ちてくることを熱心にやること

聖書の愛アガペーとは神と人との愛だ。その愛を信じてても他人を愛するということは残って来ない。愛とは自分の手に落ちてくることを熱心にやることだと思う。私には他人を愛するということではできない。自分の手に落ちてくることを熱心にやること、これが愛だと思う。この金曜会にどんなまずい話でもしたくなるのは神様がそれを愛であると勘定して下さると思ってだ。思いやりでもそれが出来ればした方がいい。友人が病気だったらみてやる。気付いたらいいことは少しでもすればいい。日本に大なるキリスト教の指導者が現れたらそれはきっと親を大切にする人だと思う。これはまちがいない。だから君達は分相応に親も大事にし、思いやりを持ちなさい。

(昭和34年5月15日 金曜会)

## 入信の経路（1）

今週の日曜礼拝で話したことを山口和克君が同志会で話してくれ  
というのでもう一度話す。5月31日が私の誕生日で、ロマ書第3章  
を読み、61年を回顧した。“聖書知識”の「入信の経路を書いておく  
れ」というのに送った。

明治31（1898）年生まれ、奈良の小学校卒、外交官志望で一高入  
学、教会のバイブルクラスに入り礼拝にも出席、大正7年「イエス・  
キリストの血我等全てをきよむ」という特別説教に感激し、受洗し  
た（一高の終り）。この時内村先生が神田YMCAに進出、日曜午後講  
義、教会の邪魔をしては（いけない）と考えられたらしい。English  
を習いに行く途中ひょっこり寄ったのが第1回目、大正8年に大手  
町に場所を変え、午前10時半からに時を変えた。バイブルクラスが  
10時まであり、その後ですぐかけつくと10時半、前座の終わる頃  
に着く。こうして卒業までダニエル書、共観福音書、ロマ書を聞く。  
バイブルクラスが丁度10時までだったからこそ聞いた。

（昭和34年6月5日 金曜日）

## 信仰の経路 (2)

ロマ書 3 章の講義に感激、大正 7 年の〔特別説教の〕意味が分かる。これで自分の信仰が決まる。高校卒で伝道者になろうとしたが親は反対した。

大学に入学、卒業、(高等)文官試験に pass して安田信託に大正 14 (1925) 年入社。昭和 22 (1947) 年、この時今の仕事は自分には適当だと思わなかった。10 月に止めて伝道に入る。

1 年間牧師をしたが信仰 1 本で救われるという自分の信仰と教会首脳部とが衝突。特に 23 年 3 月、前牧師の死に際し彼を神と思うような人々に対し、そんなに個人の道徳を褒めて立派な人だと言っても故人は喜ばない、その信仰態度を学ばねばならないと言ったことから、教会の役員会が開かれ、教会の信仰は違う、求道者にはそれでもいいかも知れないが我々教会員には感心しない。別れなければならぬと若い者が強硬に主張し遂に別れる。その教会員で別に教会を作ってくれた。場所を石館先生が提供して下さったので、そこへ作った。牧師試験にも pass し、昭和 24 年にそこで伝道を始める。

(昭和 34 年 6 月 5 日 金曜会)

### 信仰の経路（3）

自分としては日本基督教団に今まで通り属していたかった。病気をしたりしたが、ドイツ語を勉強し直して、ドイツ語で聖書を読んだりしてやり直している。今考えるとこの道は自分で建てたのではなく自然にこうなったように思える。すなわち神によって作られた。今の自分の地位は他のいかなる地位とも交換したくない、満足している。この金曜会へ来るのが楽しみだ。自分に与えられた仕事を御国へ入るまで感謝と喜びをもって進みたい。伝道は神の救いを信じて生活することであって、別に人の驚くような偉いことをすることではない。ただ人にあって人の顔を見るのが伝道だと思っている。人に生まれ小さな牧師の生活をすることを喜ぶ。

塚本（虎二）先生が迷信撲滅を意図して上京し、今もこの仕事に従事しているのを感謝していると言われたように、自分も外交官を志して上京し、今天国の外交官をしているのは感謝だ。モーセにあやかって第1の25年を勉強に、第2の25年を仕事、次の25年を伝道してみたい。75歳まで生きるように思う。同志会の75年も見るだろう。…ロマ書3章21の内村先生の説教で信仰が分り、神の導きでみ心がなされるように思う。（昭和34年6月5日 金曜会）

## 阪井徳太郎会長前夜式感話

司式者と致しまして一言感話を申し上げます。会長先生が明治 35 年同志会を御創立以来金曜会にはいつもご出席下され、内会員を御導き下さいました。しかしこの 30 年は御病気のため金曜会には御出席いただけませんでした。先生はいつも達者であれば同志会へ行きたい行きたいとおっしゃっていたものです。本夕は最後にこの同志会を御訪問して頂いたのでありますから、皆様も会長先生ご出席の最後の金曜会のおつもりで、この前夜式をお持ち下さるようお願い致します。私は大正 9 年から 12 年まで同志会で御厄介になりました。毎金曜先生から直接お教えを頂きました。またその後 30 数年たち先生のお亡くなりになる前数年間、月に 1 回づつ先生のお宅を訪問する機会を恵まれまして、御晩年の会長先生より直接いろいろご指導を受けました。感銘深く記憶に残っていることは、いつもおいとまする時先生と一緒に祈ることでありました。

先生からお祈りを頂きたいと申しますと、先生がいつも“それじゃ”と仰せになってお祈りする。それから私が祈る。お祈りになるお元気がない時には「今日は祈る力がないから、小西先生祈って下さい。」と、おっしゃいました。特に忘れ得ないのは、お元気の時、

祝祷をして下さったことです。先生のお祈りの内容は、必ずいつも、残る生涯を御聖旨にかなうものとして下さいという意味が含まれていて、又長い旅路をお守り下さって有難いという意味もしばしば祈られました。30年にわたるご病気については（先生は60年間は超人の如き御活動をなされ最後の30年はご病床であった）一言も不平がましい言葉をお祈りの内に聞かなかった。長い御病気を聖旨と受け取っておられた。之は私には驚きでありました。

それからある時金曜会の席上と思うが、私達におっしゃいました。「名古屋の近郊に紡績の機械が出来た。その紡績の機械ははじめは英国から入ったのだが、しかしそれを日本が学んで作ったけれども後には英国製よりも、もっといい機械を作って英国に逆輸出している。それと同じように基督教についても外国から学ぶけれど、日本人はそれよりももっといいものを作り得るのではなからうか。それで同志会においても我々はキリスト教を学ぶけれども吾等のキリスト教の理解が、実に外国人よりもまさる理解をもって、それを世界にまで逆にひろげることになれば、まことに結構なことと思う。こういう意味で同志会を建てたんだ」ということを。そして私はそれを大変感銘深く聞いて、今にはっきり記憶しているのでありまして、

同志会が日本のキリスト教史のみならず世界のキリスト教史にこの名が残るようにと、先生のご意思がそういう風に実るようにと希望します。

私もまことに小さな天分をもって分相応に努力してもってこの同志会創立の御主旨に副いたいと思っております。

(昭和 34 年 6 月 11 日 阪井徳太郎会長前夜式 同志会ホール)

## 阪井徳太郎会長の思い出

会報の原稿で、一応会長先生についての事は記した。会長先生の御生涯について感想を述べてみたい。会長は名古屋近くの貧乏な士族の出で、中学も3年でやめられ、四日市の歯医者の方に住み込んだ。しかし志を立て上京し、立教大学の校僕をしながら大学を出られた。その時学生だった小林牧師と知り合いになられた。そして自費で渡米され、B. D. の資格を取られたらしい。私に祝祷して下さった事からも分かる。そして日ロ交渉に金子堅太郎の下で懐刀として活躍した。それから外務省で10年ほど働き次に三井に入り、三井合名の理事になられ、昭和10年頃におやめになった。このことで会長の意志の強さを痛感させられる。次に会長は官界でも実業界でも大きな仕事をされたのは、会長先生が非常に親切であったという人柄が与っていると思う。私などは、親切そうで冷淡だ。会長は人を信服させるものを信服させるものをもっていた。

もう一つ、会長は非常に聡明であられたこと。官界では東大出に押されると判断され、実業界に変わられた。大勢を見通し、practicalな判断力をもった。先生が30代の若さで、同志会を始められたのもことを示すと思う。黒崎幸吉先生は、晩年になってから寮を始めら



れている。以上の方面は、我々も学ばなければならない。

さて同志会の創立についてさらに言うと、会長は、牧師になれなかったことの代りとしての神への奉仕という意味があったのではなかろうか。高瀬先生のお話のように「神の仕事は残る」ということである。会長の三井、官界での仕事に比べてこの同志会は今なお残り、ますます光り始めている。

それから先生の30年の病気について。会長の始めの60年における仕事はまさに驚くべきものである。そういう活動家が最後の30年ジッとしていることは悲劇であろう。しかるに会長は、一言もこれについて愚痴をもらしたことはなかった。全く神に服従した態度を見た。この30年の間に神に学ぶべきことの最重要なことを学ばれたと思う。勇気凛凛闘志にあふれる60年代にみられたが、やはり人間の一番大切なことは働いて大きな業績をあげることではないと思う。臥せていられてもまだ同志会の大黒柱であった。それが同志会の見通しがつき、又阪井家についても御令息の立派な姿への成長の後で天に召されたのである。人の死は天に任す者である。

(昭和34年10月16日 金曜会)

## 根がつきた時奇蹟が分かる

内村先生はこのように書いておられる。「私にはもう一つ考えるべき奇蹟があると思われる。それは酒がなくなった時にキリストが奇蹟をされたことである。我々の日常生活にはどうにもしようがない時があり、我々の勇気がなくなりもう駄目だと思った時、神が我々に力を与えられる。我々の根がつきた時は我々は本当にキリストの奇蹟が分かる。信ずる人は年をとっても天をかけることも出来る。それほど力を与えられる。「驚の如くに天をかけることが出来る」と書いてあるが、これは奇蹟から来ている如くに思われる。聖書にはっきりと書いてある。我々が力を感じないのは霊を感じないのである。我々は学生であるがこの力を信じなければならない。私は、生命は永遠だと信じているが、この永遠を信じることが大切である。このような意味で、この奇蹟は真に味わうべき奇蹟である。

(昭和 34 年 11 月 6 日 金曜会)